

饒舌な娘たち—Drucilla Cornell と Jamaica Kincaid の 自伝的作品を読む

Talkative Daughters and Dominant Mothers in Female Autobiographies: The Cases of Drucilla Cornell and Jamaica Kincaid

岩瀬 由佳
Yuka IWASE

…female autobiographies typically present the self as *identity through relation*. This relation is not one of dependency or mastery but rather of *recognition*, whereby disclosure of the self emerges through identification with some other, who may be a person, family or community.

— Anne McClintock

「自伝」、もしくは「自伝的」といった表現形式は、表現者にとって特別な表現手段となり得る。特に、抑圧的な状況下にある表現者が自ら行使する主体性を示す手段として、Micheline Adams が「フェミニストとポストコロニアル思想家の両者が自伝をエンパワメントの手段としてみなしている」(9) と述べるように、フェミニストたちにとって、「自伝」という self-representation は、「女性たちが自分自身の人生を歴史的にも根拠のあるものと明確に理解し、かつ男性優位の歴史解釈を変化させ、男性中心主義の男性たちが女性たちの人生経験を理解する」(Sosniski 30-31) 契機となり、「他者によって書かれた歴史を受け入れる代わりに、自分たち自身の経験を記録にとどめるポストコロニアル作家たちにとって、自伝は同じような役割を果たす」(Adams 9) 可能性を秘めている。

ただ、Gayatri Chakravorty Spivak が指摘するように、「読解」という名の「誤読」の危険性を看過してはならない。

我々が思い起こさねばならないのは、テキストがネイティブ・インフォーマントの視点を活用しつつ、想定された読者から想定された受け手へ飛び移ろうとする際に、それを遮る読解という発想である。つまり、ヨーロッパ中心的伝統によって公認された自伝の利用を拒否するということだ。「自伝」は、支配的な研究者、あるいはフィールドワーカーによって仲介

され、人類学や民族言語学などの「科学」の「客観的証拠」として利用されるのだから。(A *Critique of Postcolonial Reason* 153)

Spivak が危惧するように、植民地主義のようなある支配的関係性のなかで「自伝」を解釈する際に、それが意識的、無意識であれ、中立公正で客観的なスタンスを装いながら帝国主義的イデオロギーが介入し、「誤読」を引き起こす恐れがある。本来、self-representation を目的とした「自伝」の作者が、「それ自体としては空白でありながら、西洋（あるいは西洋モデルの学問）のみが書き込むことのできる文化的アイデンティティのテキストを生成させる存在」(6)としての「ネイティブ・インフォーマント」に巧妙に移し替えられてしまう。そういった意味で、テキストに沿わない「読解」とは、単なる「誤読」のみならず「多様な世界に単一の世界的秩序を押しつける知の暴力」(Spivak 234)ということになるだろう。

また同様に、伝統的な家父長制度の検閲作用によって、「自伝」のなかに再構築された女性たちの声が意図的にかき消され、「誤読」に至るまでもなく「読解」することすら拒否されてしまう可能性も生じてくる。

しかし、様々な危うさに晒されながらも「自伝」という表現形式が、女性たちにとって、コロニアル/ポストコロニアルの状況下にある人たちにとって、自らを語る主体性を手にする有効的手段であることは確かだ。語る術を知らない、語る場を持たないサバルタンに比べれば、「自伝」によってself-representation できる立場にある者は、すでにある種の特権を得ていると定義されうるかもしれないが、植民地主義であれ、伝統的な家父長制度であれ、あらゆる抑圧的な状況下で絶えず周縁化されてきた者たちが、沈黙を破り、自らを開示する空間(テキスト)を生み出すという創造的行為は、自らの主体性を行使することに他ならない。

本稿では、一見したところあまり接点がないようにも思われる二人の女性の「自伝的評論」あるいは「自伝的小説」を取り上げ、彼女たちのテキストに寄り添いながら、「娘」という視点から「母」、そして「祖母」との母系の連鎖のなかにみる女性たちの絆と葛藤の軌跡をたどる。「饒舌な二人の娘たち」は、そこで何を語るのか。

1. Drucilla Cornell: 母と娘、そして女性の尊厳を求めて

「自伝とは、歴史そのものを回復させる一手段でもある」(9)と Adams は述べているが、Drucilla Cornell の『女たちの絆』(*Between Women and Generations: Legacies of Dignity*, 2002)¹ はまさに Cornell 自身だけではなく、彼女の母、そして祖母の人生という「女たちの歴史」をフェミニズムの視座から再現した「自伝」と言えるだろう。Cornell は、「再現は、決して単なる受動的な行為ではない。意識的であれ無意識的であれ、書き手が歴史を書くときは、自分を再現するのだ」(81)と述べ

ているが、母の歴史、祖母の歴史を「再現」することにより、「わたしは彼女たちに向けて、そして彼女たちを通して書く」(26) のであり、彼女たちの影響を強く受け継いだ自分自身を顧みることになる。さらに Cornell は、祖母、母、彼女自身の私的な人生を語りながら、各世代の女性たちが直面した(する)であろう自由や権利を阻む障壁を巧みに表出させ、公な議論へと敷衍化する。その議論には、ポスト構造主義の Jacques Derrida、Jacques Lacan の精神分析論、Spivak のフェミニズム、ポストコロニアル批評など錚々たる現代思想家たちの理論を自由自在に横断しながら彼女の深い思索の流れが浮かび上がり、難解ではあるものの、示唆にあふれた論旨である。

1950年、アメリカ合衆国の上位中流階級の白人家庭に生まれた Drucilla Cornell は、現在、ラドガーズ大学政治学部教授であり、自他ともに認める「行動するフェミニスト」である。彼女によれば、母の尊厳死がこの「自伝的評論」を執筆するきっかけであり、母の遺言でもあった。不治の病と診断され、長年苦しんできた母親は、娘と様々な議論を重ね、医師の指示を仰いだうえで、理性的に尊厳死を自ら決断、実行した。旅立つ日に彼女が語った「死ぬ時になってやっと自分自身になれる」(26) という言葉は、あまりにも重く、切ないが、母にとってその死は「母自身の精神の自由の行使」(xviii) であり、その母親の尊厳を尊重するために Cornell は母の死に立ち会い、女性の尊厳についてより深く考えるようになったのである。だが、決して本書は尊厳死の是非を問うものではない。女性の尊厳が抑圧され、女性が自分たちの権利を自由に行使することが広く許されなかった祖母や母の世代の沈黙を「自伝」を通じて言語化すること、更に言えば「合衆国だけでなく世界中の女性の状況を改革する運動のための条件として、尊厳が取り入れられること」(xix) が、本書の主旨であると考えられる。

Cornell にとって「尊厳」とは、フェミニズムと切り離せない。「わたしもやはり、フェミニズムは、女性の尊厳を認めるところから始まらねばならないと考えている」(1) と切り出し、「繰り返し、わたしは訴えるだろう、他の女性たちの尊厳を認めることが、フェミニストの政治の倫理的の基本線である」(2) と述べている。「尊厳」は、観念的で定義することが難しい言葉ではあるが、「少し別の言い方をすれば、尊厳とは、わたしたちの自由を尊重しようというもう一つの世界を現出させようとする、わたしたちの主張なのだ」(2) と Cornell は簡潔に定義づけしている。そこには、「どんな女性にも尊厳があるのさ。どんな境遇にあろうともね。辛い思いをしているからといって尊厳をなくしたわけじゃない。女性に必要なのは尊厳を認められることであって、憐れんでもらうことじゃない」(1) という少女時代に繰り返し聞かされた祖母の教えがある。しかし同時に、Cornell は、他者の尊厳を尊重することの難しさを率直に告白している。「わたしは長い間、母や祖母とどう折り合いをつけるか、また母と祖母との関係をどう付き合っていくかに苦勞してきた。わたしが学び取ったのは、他の女性の尊厳を尊重することがいかに困難か」(5) ということだと。実際に彼女の祖母と母親の関係性をとってみても、その困難さは切実であり、「しばしば、女性たちの関係の中では、とりわけ世代をまたぐ女性たちの友情と愛の中では、わたしたちは互いを尊重しそこなってしまう。女性たちは「性的」な問題から若い女性を守るためという名目で、あるいはうまく生きていくための助言

をするという名目で、娘たちや自分たちの後の世代の女性の尊厳を損なう」(xviii-xix) という Cornell の言葉が、両者にもぴったりと当てはまる。

Cornell の祖母は、当時としては非常に稀な女性の一人であった。ドイツ移民の貧しい労働者階級の娘として生まれ、共働きの両親に代わって幼い頃から兄弟の面倒と家事を行い、工場に働きに出るために高校も中退せざるをえなかった。それでも夢を諦めきれず会計士になろうと働きながら夜学に通う努力家でもあった彼女は、1920年代の進歩主義に傾倒する印刷会社の経営者であった祖父の再婚相手になることによって、劇的な人生の変化を手に入れた。早くに未亡人になった祖母は、周囲の反対を押し切って夫の会社経営を引き継ぎ、その類まれな経営手腕をもってして会社を成長させていく。80歳を過ぎて会長椅子を退くことなく、当時の女性としては破格の権力と経済力を手にしてきたのだ。アルゼンチン大統領夫人 Eva Perón を個人的に支援する活動を行う一方で、従業員たちの福利厚生に力を入れるなどリベラルで行動的な人物でもあった。そんな彼女を Cornell は、「祖母は、その時代の女性には稀な自由な精神の持ち主だった」(9) と形容するが、実のところ、祖母は母(娘)を「自由な精神」ではなく当時の「女らしさの規範」(14) のなかに閉じ込め、「皮肉なことに、保護するといえながら、祖母は甘やかすのと支配するのとの両方で娘を窒息させていた」(19) のだ。Cornell のフェミニズム的分析によれば、「無意識のうちに祖母は、祖母が享受している「自由」な人生を男性中心的社会は許してはくれないだろうと「知って」いた」(19) が故に、いつしかその罰のために大切な娘が自分のもとから奪われてしまうかもしれないという恐怖心に絶えず取り憑かれていた。それを払拭するために、祖母は、性について、結婚について、女性のキャリアについて娘に一切語ることなく「沈黙」を貫いたまま、その当時、1950年代の社会が求める「女らしさの規範」、つまり、ヘテロセクシャルなセクシャリティーを基盤とした良き妻であり、良き母としての人生を娘(母)に強いたのである。それを内面化した娘(母)は、その従順さによって自分の人生に大きな損失を被ることになる。病弱を理由に大学を退学させられ、求婚者を追い払われて祖母の決めた男性(Cornell の父親)と18歳で結婚することになるのだ。祖母は、保護の名のもとに娘(母)を支配し、彼女の尊厳を文字通り奪っていたことになる。当時の「女らしさの規範」を逸脱してきた祖母が、全く正反対の価値観を娘に押し付けるというのは、矛盾した行為のように思われるが、これは、男性を凌ぐ財力と権力を所有し、かつ大胆で勇敢な女性であるとみなされる祖母でさえも、その深層心理の中で当時の伝統的な家父長主義に怯え、いかにその制裁を怖れていたかということの表れであり、当時の家父長的社会支配構造の根深さと影響力を圀り知ることができるだろう。その祖母に対して、娘(母)は、「祖母自身は持っているのに、母には持つことを許さなかった何かを祖母が奪ったと考えていた」(14) が、不幸なことに、それを語る言葉を知らず、語る場を持たなかった両者は、「沈黙」を貫き通すことしかできなかった。彼女たちは、語り合う術をもたなかったのだ。ただ、その従順な娘(母)の唯一の抵抗は、「子供を産まない」という主張であった。しかし、その抵抗空しく、結果的に Cornell を含む三人の子どもの母になったのである。

Cornell 自身、「わたしの母が、女らしさの制限に強く縛られ、夢を見る空間さえも持ちえなかった

ことを思うと心が痛む」(xx) と述べている。そこから Cornell は、「イマジナリーな領域」(imaginary domain) と名付けた「夢を見、自分が何者であるかを知る道徳的かつ精神的な空間」(xx)、「自分がこうありたいという人格を想像し直し表現する心の空間」(xx) という考え方を発展させた。精神分析を手掛かりに、「イマジナリーな領域とは、すべての他者の尊厳を尊重する倫理的な枠組みの中で、自分自身の欲望²とセクシュアリティの意味を思い描き表現し、明瞭にとらえるための道徳的で心的な権利である」(29) が、「現実の空間に決して還元できないという意味でイマジナリーなもの」(29) と説明している。Cornell は、「文化的・法的に押し付けられてきた女らしさの規範」(29) に対して、それに縛られないこの「イマジナリーな領域内で生じる女性的なもの」の無限さ、その創造性に注目するのだ。本来、イマジナリーなものとは、両親や近親者に代表されるような「始原の他者との同一化を通じて原初的に形成される」(29) が、その一方で、その「始原の他者」の影響力により、誤った自己イメージを形成し、自分自身の欲望すら抑圧する「内なる暴君」(30) に支配されてしまうことがある。その一例として Cornell は Marie Cardinal の自伝的小説『血と言葉—被精神分析者の手記』(*Les mots pour le dire* 1983) を分析し、「始原の他者」なる母親の破滅的な影響力により、「自分を母の意識的・無意識的な望みと同一化することから救い出す退行的な力を人生の中で持つことができず、母の望みに屈服する」(42) ことになった Cardinal が心身ともに病んでいく過程を明らかにしている。その論には、Judith Feher Gurewich の Lacan 解釈が援用されているが、Cardinal は「母には自らの欲望を表現する言葉がなかったこと」(55) に気づき、ようやく「母の享樂として母の中に見ていたものに自分が完全に取憑かれてしまっていたことがわかる」(55) のだ。Gurewich によれば、「他者の享樂とは、他者の欲望の対象であることとは対照的に、他者の快樂の対象として利用されたり、濫用される主体の経験を指している」(3) が、「他者の享樂は、究極的には存在していない。それは、約束であると同時に脅威も含む、ファンタジーの構築物である」(8)。要するに、「他者 / 母の享樂」に呑み込まれた状態、「他者 / 母の手中で生きているというファンタジー」から解放されることによりはじめて、Cardinal は欲望する主体として自己を主張できる存在になれるのだ。Cornell の母親も長年、程度の差はあるにせよ「母(祖母)の享樂」に取り込まれ、母(祖母)が主張する「女らしさという文化的・法的に強制された規範」に拘束され、自らの欲望、尊厳と自由を主張することを自ら無意識のうちに抑圧してきた。自らの意志による自らの死の決断こそが、恐らく、彼女にとって最期の「欲望する主体」としての尊厳と自由を行使する機会であったと考えられる。

Cornell は、「女性にとって強調されるべき大事なことは、欲望する主体として自己を主張できることだ。尊厳の名において、そして、それを人格という理念に読み替えることによって、わたしたちは、女性たちが自分自身の欲望を行動に移せるよう、そして何が起き、いかに自分たちが変わるのかがわかるように心的な空間を開けておくべきである」(67) と述べているが、その「心的な空間」、これこそが先述の「イマジナリーな領域」である。「文化的・法的に強制された規範としての女らしさ」に代わるものとして、Cornell は、「イマジナリーな領域内の女性的なるもの」について、次のよ

うに宣言する。

ここで、わたしがイマジナリーな領域内の女性なるもの、ということは何を意味しえるのかを明らかにしておきたい。それは、女性のなんらかの属性であることを意味しない。あるいは、「それ」は、女らしさと何らかのかたちで関係しているわけでもない。いったん伝統的な精神分析が認めてきたエディプスの神話というファンタジーを追い払ったならば、イマジナリーな領域内の女性的なるものとは、わたしたちが女性たちを想像し直し、それを定義し直すことの中に存在するようになるだろう。女性とは何かを想像し直し、定義し直す終わりのない営みに不可欠なのは、わたしたちは女性としてそれぞれ異なって存在しうる、ということを確認することである。というのも、わたしたちは各自、その想像力と言語の中で「それ」に意味を与えるからである。「それ」は、それ自体で存在するのではなく、表現され、文節化される中のみ存在する。(69)

Cornellによれば、「イマジナリーな領域内の女性なるもの」とは、「それ」ということばが示すように、他者から押しつけられ、固定化された象徴ではない。各女性たちが、それぞれパフォーマティブに次から次へと想像し直し、定義し直す、終わりのない彼女たちの創造性の中に存在している。Cornellにとって、「フェミニスト理論の核心であると考えてきた自由と美的なものの場所を提供する」(70)と想定される「それ」は、各々の女性がそれぞれの「理想自我」を育む場であり、女性の尊厳を尊重する原点となる場でもあるのだ。

このようにCornellは、母、そして祖母との関係性を通じて、他者の尊厳を尊重することに深い理解を得てきたが、さらにそれは、身近な女性たちの尊厳のみならず、非欧米社会、非白人種の女性たちの尊厳にも及んでいる。そこで問題になるのが、白人フェミニストが陥りがちな「グローバルな女性の連帯 (global sisterhood)」(103) という考え方の危うさである。

白人フェミニストは、「グローバルな女性の連帯」という主張が、いわゆる文明化された欧米の自由世界と、援助が必要だとみなされている「その他の世界」との分断を複製してしまうことになりかねないことに気づくことができず、異議申し立てを受けている。わたしたちは、他者の声に耳を傾けることをせず、自分が必要だと感じる者が他の誰にとってもそうだと思ひ込み、女性の解放のために必要と私たちが想像するものを押し付けてしまうことがある。善意からであっても、わたしたちはしばしば、自ら新たな救い手の役割を引き受け、南の諸国の不運な姉妹を助け救うために「どこか外国へ」出かけていかねばならないと考える。しかし尊厳が本来的に含む倫理は、わたしたちにオリエンタリズムに満ちた、あるいは帝国主義的な準拠枠組みがありはしないかと厳しくチェックするよう要請する。(96)

この「いわゆる文明化の使命のために活動する西欧フェミニストたちには、帝国主義の恐るべき歴史とは切り離せない危うさがある」(3) という彼女の主張は、彼女自身、パラグアイから養女 (Sarita、生後六ヶ月) を迎えたシングルマザーであり、白人フェミニストとしての立場から、自戒を込めて本書でも繰り返し何度も言及されている。異なる多様な文化の女性たちとの対話を通じた相互理解なしに西欧の論理を「その他の世界」で行使することは、かつての帝国主義の歴史と何ら変わりがない。それは、さらなる両者の緊張関係を高めることになるだろう。

Cornell は、自身の問題を踏まえて、西欧の女性たちが南の発展途上国から養子を手にするのは「合法的侵害 (enabling violation)」(*The Postcolonial Critic* 137) ではないかという Spivak の言及に対し、次のように述べている。

南の諸国に対するその合法的侵害について、わたしがはじめに行った責任の取り方は、自分の考え方をすべて一親族や市民、言語といったものについて、自分が持っているとは思っていなかった考え方も含めて一ことごとく考え直すことだった。わたしは、娘は文化的遺産を失ってはならず、彼女がそれを保つためにわたしが手段を講じなければならないと決心した。わたしは、彼女が合衆国とパラグアイの二重国籍をもてるように、そしてこれからもそうであることについて譲らないことにしている。(112)

たとえ彼女の行動が善意に基づく人道的、倫理的行為であるとしても、それは「その他の世界」の人々にとってみれば、単なる独善的な自己満足に過ぎず、先にも述べた帝国主義的な「知の暴力」の手先として他者の尊厳を無視することになりかねない。Cornell は、自身も含めた白人フェミニストたちの傲慢さに絶えず目を光らせ、批判的な姿勢を取り続けることが、不可避であること、それが他者の尊厳を尊重することにつながると認識している。

そして、忘れてはならない事実が、欧米諸国における非合法移民に代表される有色人種の女性たちの労働力を低賃金で搾取している多くの例が、実のところ白人女性であるということだ。「結局のところ、雇用主であり、したがって女性間の不平等を永続させているのは白人女性なのだ」(105) という Cornell の指摘は、理想と現実のはざままで白人フェミニストとしていかに他者の尊厳を尊重することが困難なことであるかを浮き彫りにする。しかし、本書にも収録されている Cornell が実践したドラマティック・インタビューの手法、「個別の人物を前面に出して、その人物の尊厳と、その尊厳が表明されるのを目にした人が抱く尊敬の念とをともに輝かせる」(116) という実際に合衆国で移民として、あるいは不法就労者として働く女性たちの声に真摯に耳を傾け、それをテキストに再現するという彼女の新たな試みは、Spivak のいう「ネイティヴ・インフォーマント」という西欧アカデミズムが西欧の論理を書き込むテキスト提供者のそれではなく、自由に彼女たちの現実の人生を、日常生活そのものを語る場を生み出し、「語る」ことで自らの主体性を行使する機会を提供したという点で、価値ある取り組みだと考えられる。彼女にとって、そういったグローバリゼーションの陰で「沈

黙」を余儀なくされる女性たちから「声」を引き出し、それを実際に社会に発信するという試みは、女性たちの尊厳を尊重するフェミニズム的实践といえるだろう。祖母と母、自分、そして娘（養女）へとといった縦の繋がりだけではなく、すべての女性たちと横へ横へと繋がり、その繋がりをどこまでも広めていくことが彼女の求める他者の尊厳を尊重する道徳的なフェミニズム的連帯の在り方だろう。

2. Jamaica Kincaid: *Annie John* にみる植民地社会の母と娘

Jamaica Kincaid は、1949年、カリブ海の小アンティル諸島に属する旧イギリス植民地、アンティグア³生まれのアフリカ系女性作家である。16歳で故郷を離れて以来、合衆国に移住し、*Art Direction* や *New Yorker* といった雑誌に寄稿する経験を経て、1983年に『川床で』(*At the Bottom of the River*) で鮮烈なデビューを飾った。「リアリズムと詩的な抽象概念を合わせもつ」(Edwards 7) と評されるその独特で繊細な表現力で読者を魅了し続けてきたが、その作品の多くが自伝的小説である。Moira Ferguson とのインタビューで「わたしにとって自伝というものがないければ作家である理由はありません。(中略) 書くということは、わたしの人生を書き留めるという行為であり、だからこそ自伝的でなければならないのです」(176) と述べるほど Kincaid にとって、「自伝」は重要な表現形式である。Adams が「彼女のテキストのすべてにおいて、自伝が女性として、西インド諸島(カリブ)出身の人間として、自らの主観性を分節化する空間としての役割を果たしている」(10) と指摘するように、単なる self-representation に留まらないアイデンティティ・ポリティックスの表現手段として「自伝的小説」をとらえていると考えられる。過去数世紀にわたりイギリス植民地であったアンティグアに生まれ育った Kincaid にとって、それは、自らの人生を語りながら、同時に植民地主義を批判し、被植民者の女性たちへの社会的抑圧を告発する場となっているのだ。

本稿で取り上げる『アニー・ジョン』(*Annie John*, 1985) も初期の自伝的小説であり、アンティグアを舞台に少女 Annie (Kincaid 自身と想定される) の視点から語られる思春期の大きな心の揺れ、特に母親との確執が際立って印象的に描かれている。Susan Kenny が「この作品があまりに感動的で身に覚えがあるのは、(アメリカの) アンカレッジでも起こりそうなことであり、私たちの誰にでも、いつでも、どこにでも起こるにちがいないと思えるからだ。それこそが、まさしく本力であり、英知であり、真実なのだ」(6) という賞賛を *New York Times Book Review* に寄せたように、読者の共感と郷愁を誘う普遍性を内在した作品である。Kincaid 自身は、Selwyn R. Cudjoe とのインタビューでこの作品を読んだ白人女性から「まるで私と母との関係のようです」というような手紙が来ると妙な気がする(221) と述べているが、そういった普遍性の根底には、Kincaid 作品が「非常に私的で内的であるフェミニストの言説の本質にフィットしているからではないか」(222) という Cudjoe の指摘は鋭い。これに対して彼女は「そうとってもらっても構わないけれど、わたしはフェ

ミニストではないし、何か特定のグループや派閥に区分されるのは好まない」(221-222) とそっけなく否定している。しかしながら、彼女の作品の中には、植民地の女性たちを二重に支配する植民地主義と家父長制に対する異議申し立て、フェミニスト的表象が頻出することから、彼女のテキストがフェミニズム的解釈の俎上に載りやすいのは理解できる。Cornell は『女たちの絆』の日本語版序文で、「母娘関係はフェミニスト理論と実践にとって核心にある」(vi) と述べているが、実際のところ、Kincaid も「『アニー・ジョン』は、少女とその母親との関係についてのもので、わたしの創作人生の土壌は、私の母なの。(中略) 母なしには創作することも、芸術に興味をもつこともなかったと思うわ。母がわたしの「創造力の大地」なのよ」(Cudjoe 222) と答えている。また、Annie⁴のよう自由を求めてアンティグアを離れた際にも「自分は母を通じて世界を見ていたのだと知った」(Cudjoe 227) とも述べている。それは、彼女が母親からいかに多大な影響を受けてきたかを示唆するものであり、彼女にとって「母と娘」という関係性が、彼女の創作の源であることに間違いはない。

『アニー・ジョン』の主人公、Annie も幼い頃は母親が世界のすべてであった。愛しい母親に愛され、「まさに天国のような生活」(25) を送っていたのだが、その生活に変化が生じたのは、彼女が10歳の時である。それは「死」と「セクシャリティー」への目覚めに起因していると考えられる。美しく優しい母との満ち足りた幸せの中で、Annie の周囲で次々と起こる「死」は、母とのこの上なく幸せな時間が永遠ではなく限りがあることを彼女に知らしめず役割を果たし、12歳の頃に目撃した両親の性的な場面は、その密接な関係を破綻に追い込む。これを Gurewich の論で分析するならば、「始原の他者である母と一体化していたという娘 (Annie) のファンタジー」の崩壊を意味する。「欲望する存在としての母」、つまり母親が自分以外の関心 (父に対する母の欲望) を求めて離れていく事実を知ることにより、Annie は、自分が母とは異なる別個の存在であることを知り、母親の欲望と自分自身の欲望を区別することができるようになるのだ。15歳のある日 Annie が見た夢、「頭の中で「母さんはチャンスがあれば、わたしを殺すだろう、わたしはチャンスがあれば母さんを殺すだろう」という言葉がぐるぐる回る」(89) という夢は、Annie と母との緊張関係を示しているが、言い換えれば、母とは別個の存在であり、母とは異なる自分自身の欲望をもつという彼女の心的分離の葛藤が象徴的に示唆されていると考えられる。Annie と母親との関係悪化は、誰もが覚えのある思春期の通過儀礼的経験であるといえるだろうが、Annie の母親に対する過度の反発の背後には植民地主義の歴史が暗く潜んでいる。

アンティグアを含むイギリス植民地では、植民地政策を円滑に進める一環として、被植民者たちを「文明化」という名のもとに地方性を全く顧みない植民地教育が長年行われてきた。それは、宗主国イギリスの優位性と被植民者たちに「劣性表象」を刻み付け、植民地支配を正当化する「教育」という名の植民地化システムであったのだ。Kincaid もそういった教育を実際に受けてきたひとりであり、Cudjoe とのインタビューでも「わたしの教育はまさに「大英帝国」という感じだったわ」(217) と皮肉交じりに語っている。Annie もきちんとその偽善性には気づいている。「もちろん、

時々、先生や教科書のおかげで、いま私たちは、本当はどっち側にいるのか—主人の側か奴隷の側か、わかりにくくなる。だってこれは歴史、全部過去に起こったことで、今は誰も昔のように振る舞わないから。私たちはみんな、もうとっくに亡くなったのだけれども、ヴィクトリア女王の誕生日を祝う。でも奴隷の子孫である私たちは、ほんとうは何が起こったのかをととてもよく知っている」(76) というように。

実は、このような公の植民地教育だけではなく、もっと身近なところにも宗主国の優位性を効果的に伝え、イギリス的価値観、特にヴィクトリア朝中産階級の価値観⁵を内側から補強し、家庭内に浸透させる役割を果たした者たちがいた。それが被植民者の母親たちだったのだ。Annieの母親もこの植民地主義の仲介者として機能している。イギリス中産階級の娘のように、Annieにピアノや行儀作法、裁縫などを強制的に習わせ、将来、「良妻賢母として家庭を守ることが女性の役目」であるというヘテロセクシャルな強制的異性愛を突如強いるようになる。Kincaidも自分の母親が「イギリスびいきだった」(Cudjoe 217)と語り、植民地の貧しい家庭だったのにもかかわらず、そんなことは感じさせないほど「中産階級のイギリス人のように教育され、最高のテーブルマナーや正しい英語発音を教え込まれた」(Cudjoe 219-220)と回想している。この母親の行動には、宗主国の価値観を完璧に娘に教え込み、「妻であり、母である」という安定した社会的ポジションをなんとしても娘に与えたいという思惑があると考えられる。1950年代であってもカリブ海地域では、全体の三分の二の母親が合法的結婚をせず子供を出産しており、Kincaid自身、Emilia Ippolitoとのインタビューで自分の出産証明書の父親の欄が空白で、本当の父親が誰であるかを知らずに育ったが、「それは非常によくある話だ」(155)と語っている。Kincaidの母親はその後再婚し、その人物が、Annieの「父親」と呼ばれる男性のモデルになっていると考えられる。母よりも36歳年上という年老いた父にも母との結婚以前に他の女性との間にもうけた子どもが二人いることが語られている。こういったカリブ海地域特有の状況下で、娘にイギリス的教育を与え、幸せな合法的結婚をさせるということが、母の願う理想の規範モデルであったのだ。しかし、それはAnnieにとって、植民地主義と母との共犯関係を意味することに他ならない。

そこでAnnieは断固として支配的な母に反発していく。学業に秀でた優等生の一面をもちながら、軽々と嘘をつき、図書館から本を、父親の金庫から金銭を盗み、墓場で友人の女の子たち同士で互いに身体を見せ合うというような問題行動を次々と起こしていく。その最たる反発の例が、母親が嫌う粗野で不潔な少女、「赤い少女」と呼ばれる少女との友情だろう。「赤い少女と一緒に白人の富裕者たちが乗った船を岩に衝突させて、断末魔の叫びをあげる人々を見て大笑いする」という彼女の夢は、白人植民地主義者と彼らの価値観を押し付ける母親への反抗だと解釈できる。Annieのこの反抗は、Gurewich的に言えば、CardinalやCornellの母の場合とは違って、支配的な「母の享楽」に呑み込まれることなく、健全な精神を育てている証のように思われる。しかしAnnieは、急激に心身ともに衰弱していく。通りで偶然、彼女が他の学校の男子生徒たちと立ち話をしているところを「淑女の振る舞いではない」と母親に見咎められ、「あばずれ」(102)だと一方的に罵られた際に、「そう、こ

の父にしてこの息子、この母にしてこの娘ですものね」(102) と言い放った時を境に。「地面が二人の間で割れ、深い広い裂け目ができたように思えた」(103) という表現が示すように、母と自分との間にできた修復できないほど深い心理的な溝が Annie を追い詰めたのだ。どんなに反発しようとも、Annie にとって母はかけがえのない母である。母とは「別個の存在」であることを認め、完全に母と心的分離を果たすことは、激しい痛みを伴うプロセスである。

原因もわからず、回復する見込みさえ立たない Annie を前に、両親が困り果てているところに突然姿を現したのがドミニカに住む母方の祖母、Ma Chess だ。祖母は、アフリカ奴隷たちによって持ち込まれたアフリカ古来の民間宗教オビア (Obeah) を操り、西洋医学も手に負えなかった病から Annie を救い出す。実のところ、Annie の母もメソジスト派のキリスト教徒であるが、オビアのまじないや呪術を密かに信じている。Renu Juneja は、母親のこの二重性を「カリブ文化がもつ二重性の再現」(40) であると指摘しているが、これは Annie の母に限ったことではない。カリブ海地域出身の Elizabeth Nunez (トリニダード) や Edwige Danticat (ハイチ) のような女性作家たちもその「カリブ文化の二重性」、つまり、表面上は「キリスト教徒」を装いながら、いざというときには「オビア」を頼るという二重性について言及している。Kincaid 自身も「わたしは、オビアにとっても関心があったわ。それは、わたしの日常生活の一部のようだったのよ。わたしは、下着に何か詰まった黒くて小さなおい袋を身につけていたの。いつも特別なお風呂にも入ったわ。それはね、とても長い間、わたしの生活の完全なる一部だったのよ」(Cudjoe 229) と幼い頃に母親が施してくれたオビアの数々を披露している。アフリカ的な精神性と支配者から与えられた文化という二つの相異なるものが混在しているこの混濁性こそがカリブ海地域の特性であると考えられる。

しかし結局のところ、Annie を癒したのは祖母の力であり、支配者たちによって「野蛮で邪悪なもの」と排除されながらも人々の中で信仰され続けてきた「オビア」であった。それは、奴隷制にはじまる抑圧の歴史を生き抜いてきたアフリカ系カリビアン人の姿と重なる。そこから「オビア」を自分たちのルーツとしてのアフリカ、つまり文化的本質主義に根差した「反植民地主義」のシンボルと読み取ることもできるが、興味深いことに、イギリスの看護学校へ行くためにアンティグアを離れる朝に、Annie は自分を助けてくれたはずの「オビア」を拒絶する。もう二度と見たくもないし、聞きたくもないと思うのである。両親に対しても「もう二人を以前のような見方では見ていないし、以前のような愛し方では愛していない。このことで辛いのは、二人は元のままであり、変わったのはわたしだということだ」(133) と考える。彼女の中で何かが変わったのだ。Annie がアンティグアで過ごす最後の朝、目覚めた瞬間に頭に浮かんだ言葉が、「私の名前は、アニー・ジョン」(130) であり、その前の晩、最後に目に入ったものが、トランク一面に書かれた大きな彼女の名前であったことから、Lauara Niera Niesen de Abruna は、それらは「彼女が自分のアイデンティティを取り戻した」(174) ことの表れだと指摘している。確かに、彼女は元の Annie ではない。「オビア」に象徴される彼女が祖母から引き継いだかにみえたアフリカ的な精神性に背を向け、母が押し付けたイギリス中産階級的価値観を拒絶しつつもイギリス本国へ留学することを選択する。それは矛盾に満ちた行動のよ

うにも思われるが、彼女は、自分が理想とする新しい生き方、新しい自分自身を自分で創造していく道を取って選んだと考えられる。そのためには、母との心的分離がなによりも不可欠であり、Annieは母のもとを離れなければならないのだ。

しかし、船上で母と最後に別れる段になって、「母さんは、何を求めているのだろう」(147)と思わず独り言をこぼす。これはGurewich的に言えば、「母と一体化していたというファンタジー」をもう一度取り戻そうとして、「母親の欲望は何なのか？」と探しはじめる子どもの心理に似ている。母の欲望の対象になりたい、母の求めるものになりたい、という母の欲望と自らを一体化しようとすることによって、「母の享楽」に囚われる罫である。しかし、Annieは母のもとを離れる。それは、辛く悲しい母との心的分離を象徴する一歩であるが、彼女自身が「母の享楽の対象」ではなく、自分自身が母とは異なる別個の自律した存在として生きるための手段なのだ。16歳の時に父親の家父長的支配から逃れるためにトランク一つを手にしてドミニカを離れた母のように、Annieも母のトランクではなく、自分自身のトランクをもって旅立つのである。

結びにかえて

饒舌な二人の娘たち、Drucilla CornellとJamaica Kincaidは、その自伝的作品の中で何を語ったのであろうか。そこには、「母と娘」の複雑で矛盾に満ちた感情の格闘と痛みと感謝の歴史が赤裸々に綴られている。母親という存在がどれほど娘に多大な影響を与え、そこから分離することがいかに困難であるかということとともに。

現在、合衆国に居住していること、文筆活動をしている女性であることを除けば、その出自においてほとんど共通点のない二人であるが、彼女たちの私的でときに内的な語りは、単なるself-representationにとどまらない力を秘めている。それは、いわゆる「公式の歴史」とは異なった、個人の歴史を再現するという遡及的行為でありながら、それを読む者、また自分たちを取り巻く社会へと波及しようとする外へ、外へと向かう力強い力を帯びている。そういった意味で、CornellとKincaid両者にとって、自伝的な作品とは、その主観性を分節化し、議論し、社会へと還元させていく空間を提供する場であるといえるだろう。そこには、両者とも他者から押し付けられた「文化的・社会的に強制された規範」、伝統的な家父長制や植民地主義といったものへのカウンター・ディスコースが明示されている。「自伝的作品」というとセンセーショナルで覗き見的な趣旨のものも多いが、表現者が自らの主体性を行使し、発信する有効な表現形式のひとつであることの確実性を両者の作品は示唆している。

1 本論文を完成させるにあたって、*Between Women Generations: Legacies of Dignity*の日本語訳は、『女たちの絆』(岡野八代、牟田和恵訳、みすず社)を参考とした。

2 Cornellによれば、「欲望という言葉は、単に性的欲望だけを言っているのではなく、自分自身のものとして

ライフ・プランを立てる能力として広義に考えられている」(31)と定義している。

3 正式な国名は、アンティグア - バブーダ (Antigua and Babuda)。イギリス植民地であったが、1981年に独立。イギリス連邦に加盟。アフリカ奴隷を祖先にもつアフリカ系が人口の大部分を占める。

4 Annie は、看護学校へ進学するためにイギリスへ旅立つが、実際の Kincaid は、アメリカを選択した。また Annie は、一人娘という設定であるが、実際には三人の弟たちがいる。興味深いことに、Kincaid の本名は、Elaine Potter Richardson であるが、主人公の名には、母の名と娘の名である「Annie」を選んでいる。

5 ヴィクトリア朝時代の価値観とは、家族を重視し、進取の気質を特徴とする。自制、勤勉、忠実、信仰などが重要なモラルとして強調される。

Works Cited

- Adams, Michelene. "Jamaica Kincaid's *The Autobiography of My Mother*: Allegory and Self-Writing as Counter Discourse." *A Caribbean Studies Journal*. 4. 1 (2006). 10 Aug. 2009. <http://anthurium.miami.edu/volume_4/issue_1/adamsjamaica.html>
- Cornell, Drucilla. *Between Women and Generations: Legacies of Dignity*. Lanham, Boulder, New York, Tronto, and Oxford: Rowman & Littlefield Publishers, 2002.
- Cudjoe, Selwyn R. "Jamaica Kincaid and the Modernist Project: An Interview." *Caribbean Women Writers: Essays from the First International Conference*. Ed. Selwyn Cudjoe. Wellesley: Calaloux, 1990. 215-32.
- De Abruna, Laura Niesen. "Dream of Leaving: Mother and Mother Country in Jamaica Kincaid's Fiction." *The Woman the Writer & Caribbean Society*. E. Helen Pyne-Timothy. Los Angeles: Center for African American Studies University of California, 1998.
- Edwards, Justin D.. *Understanding Jamaica Kincaid*. South Carolina: The University of South Carolina Press, 1993.
- Ferguson, Moira. "A Lot of Memory: An Interview with Jamaica Kincaid." *The Kenyon Review* 16. 1 (1994): 163-188.
- Gurewich, Judith Feher. "The *Fouissance* of the Other and the Prohibition of Incest: A Lacanian Perspective." (unpublished manuscript on file with the author)
- Ippolito, Emilia. *Caribbean Women Writers: Identity and Gender*. New York: Camden House, 2000.
- Juneja, Renu. *Caribbean Transactions: West Indian Culture in Literature*. London: Macmillan Education Ltd, 1996.
- Kenny, Susan. "Paradise with Snake," *New York Times Book Review*, April 7, 1985, 6.
- Kincaid, Jamaica. *Annie John*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1995.
- McClintock, Anne. *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest*. New York & London: Routledge, 1995.
- Sosnoski, Karen. "Autobiography." *Encyclopaedia of Feminist Literary Theory*. Ed. Elizabeth Kowalesk-Wallace. New York: Garland, 1997. 30-31.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. *A Critique of Postcolonial Reasons: Toward a History of the Vanishing Present*. Massachusetts & London: Harvard University Press, 1999.
- . *The Postcolonial Critic: Interviews, Strategies, Dialogues*. Ed. Sarah Harasym. London: Routledge, 1990.

*この原稿は、2006年第78回日本英文学会全国大会（於中京大学）の発表原稿を大幅に加筆修正したものです。

【Abstract】

Talkative Daughters and Dominant Mothers in Female
Autobiographies: The Cases of Drucilla Cornell and Jamaica Kincaid

Yuka IWASE

In this essay, I examine Drucilla Cornell's *Between Women and Generations: Legacies of Dignity* and Jamaica Kincaid's *Annie John* to demonstrate how female autobiographies or self-writings as a literary form allows women writers to express their subjectivities. These autobiographical works primarily focus on the relationship between mothers and daughters. First, considering the private relationship between her mother and grandmother from a feminist perspective, Cornell discusses the difficulty and importance of respecting others' dignity. To preserve female dignity, she suggests the notion of "*the feminine within imaginary domain*" in which women can freely and repeatedly create their own ideal images, instead of adhering to the culturally and legally imposed norms of femininity. Second, for Kincaid, her autobiographical novel serves as a space in which to articulate not only her self-representation but also her identity politics. In her text, Kincaid's mother functions as an agency that instills Victorian middle-class values in Annie, and her rebelliousness against her mother represents anti-colonial and anti-patriarchal discourse. Consequently, these authors' autobiographical works play a significant role in amplifying their private and inner subjects into public arguments.